三島由紀夫と手塚治虫

若松伸哉（日本文化学部国語国文学科）

人間が時間にとらわれる根源には人間の生の有限性･一回性というあり方が大きく影響しているだろう。人間は誰しもがいつしか死を迎えるため、その有限の時間をどのように使うかが重要な問題となる。

ここで紹介したいのは三島由紀夫の最後の長篇小説「豊饒の海」である。1965年から連載がはじまったこの小説は、1970年11月15日に最終稿が出版社に入稿され、同日に三島由紀夫は自衛隊市ヶ谷駐屯地でその生を終えることになる。「豊饒の海」は「春の雪」「奔馬」「暁の寺」「天人五衰」の四篇から成り、第一部「春の雪」の主人公・松枝清顕が、「奔馬」「暁の寺」「天人五衰」においてそれぞれ別の人物として転生をする。

> 私はやたらに時間を追つてつづく年代記的な長編には食傷してゐた。どこかで時間がジャンプし、個別の時間が個別の物語を形づくり、しかも全体が大きな円環をなすものがほしかつた。私は小説家になつて以来考へつづけてゐた「世界解釈の小説」を書きたかつたのである。　（三島由紀夫「『豊饒の海』について」1969年

三島由紀夫が線的（リニア）な時間軸から離れた物語を構想していたのは明らかであり、それが死してもなお転生する「豊饒の海」の形式となってあらわれている。

三島由紀夫の二歳年下であり、同じ戦後に活躍した手塚治虫もまた、人間の有限性・一回性から離れた物語を漫画「火の鳥」で表現している。彼のライフワークである「火の鳥」は1954年に「黎明編」が発表された後、断続的に1980年代まで発表される。およそ十五編から成る「火の鳥」は各々が独立した話であるが、大きな円環構造を成してもいる。永遠の命を授ける火の鳥をストーリーの中心に据えて、永遠の命をめぐる人間たちの争闘・葛藤・孤独などを描く。

三島と手塚が活躍したのは日本が敗戦から復興し、高度経済成長を遂げていく戦後空間であった。経済が発展的に成長していく繁栄の時代に、必ずしも幸福とは言えない〈無限の物語〉はどのような意味を持ち得ただろうか。それぞれ文学と漫画の分野において戦後のスターともいえる三島由紀夫と手塚治虫が問いかけるものを考えてみるのも面白いだろう。